武蔵野日曜聖書講筵

霊戦

――詩篇第46篇――

１９９５年１月８日
小池辰雄

最大の敵は自分自身　真に大胆なキリスト告白　片手の合掌　キリストは我らの避け所　霊現
永遠の青年　どうなったって構わない　求めざりしもの　言行一如　キリストの手

【詩篇46】

1 神はわれらの避所（さけどころ）また力なり、
なやめるときの最（いと）ちかき助けなり。
2 さればたとい地はかわり山はうみの中央（もなか）にうつるとも
我儕（われら）はおそれじ。
3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも、
その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。
4 河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ
至上者（いとたかきもの）のすみたもう聖所をよろこばしむ。
5 神そのなかにいませば都はうごかじ、
神は朝つとにこれを助けたまわん。
6 もろもろの民はさわぎたち、
もろもろの国はうごきたり。
神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ。
7 万軍のエホバはわれらとともなり。
ヤコブの神はわれらのたかき櫓（やぐら）なり。
8 きたりてエホバの事跡（みわざ）をみよ、
エホバはおおくの懼（おそ）るべきことを地になしたまえり。
9 エホバは地のはてまでも戦闘（たたかい）をやめしめ
弓をおり戈（ほこ）をたち戦車（いくさぐるま）を火にてやきたもう。
10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。
われはもろもろの国のうちに崇められ、
全地にあがめらるべし。
11 万軍のエホバはわれらと偕（とも）なり。

ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

●最大の敵は自分自身

今日は詩篇の46篇を選びました。詩篇の46篇は誰が好きだった詩篇だったか御存知ですか。マルチン・ルターです。これは「ルターの詩篇」と言われるくらい、彼はこれを非常に愛読した。もちろん、そらんじて知っていた。

1神はわれらの避所（さけどころ）また力なり、
なやめるときの最（いと）ちかき助けなり。

この第1節は非常に素晴らしい、46篇全体を総括しているような聖言です。

「神はわれらの避け所」

という。我々は人生では――今日は『霊戦』という題ですが――もし、自分の力でやろうとしたならば、我々は何もできない、負けてしまう。これはルターの歌の中にも、そうあります。それだから、神の力でもって戦っていく。キリストがルカ伝12章で、

「49我は火を地に投ぜんとて来（きた）れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂（せま）げらるるまでは思い逼（せま）ること如何許（いかばかり）ぞや。51われ地に平和を与えんために来（きた）ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反って分争なり」（ルカ12・49～51）

と言われた。凄い言葉です。キリストの道は戦いの道です。「キリスト教」なんていうけれども教えではない。キリスト道なんです。これは戦いの道です。何と戦うかというと、最大の敵は自分自身です。自分自身との戦いに本当に勝つ人はあらゆる戦いに勝てる。自分自身との戦いに勝てない人は、どんな戦いをしても、勝ったようで実はダメなんだ。我々は自分自身との戦いをする。

人間はみな自己肯定者、自己弁護者なんです。己を何者かと思う。それがそもそもの間違いです。だから私は、

「無者」

と言っている。キリストは自分を何者ともしなかった。最大の無者がキリストなんです。神一切ですから。自分が無い。無私、無我ということが本当にできれば、もう人生の本当の勝利者になる。ところが、人間は自己弁護者、自己肯定者である。これが実は「罪」なんです。罪とは何かというと、

「自己を何者かとしていることが罪」

なんです。キリストは自分を何者ともしなかった。

「我れ何事をも為し能わず。私は何も言うことができない。一切は神さまだけだ」

と仰った。だから、私はキリストのことを無者と言っている。世界中に、キリストのことを無者と言っている人があるかどうか知らんけれども。

●真に大胆なキリスト告白

佐古純一郎という評論家が、私の著作集第一巻の『無者キリスト』を読んで驚いた。『真に大胆なキリスト告白』という書評がある。これは「週間読書人」紙第1122号、昭和51年（１９７６年）3月15日号の新聞に佐古純一郎がそのことを書いた。

「驚くべき本だ、こんなことを言う人は他にいない」

と。

「『地にあって天的次元に入らなければ、信仰など云々してもつまらないはなしである。聖書はそういう次元の世界を開示しているドラマであるから、そのつもりで全存在的に突入してゆくに限る』と著者は鮮明に語っている。なんという痛快な、しかも、なんという正確な言葉であろう。云々」

と、佐古さんが非常に驚いて感嘆している文章がある。とにかく、私は公にやってないものだから、世のキリスト教界の人たちは大かた知りません。

私はいわゆる聖書研究だとか、聖書註解だとか、あんなものは相手にしてない。私にとっては、聖書は身をもって告白すべきものだ。だから、「真に大胆なキリスト告白」と彼は書いた。ゲーテは、

「自分の文学は全部、告白である。頭で言っているのではない、全存在で告白している」

と言った。さすがはゲーテです。だから、ゲーテの文学は素晴らしい。トルストイでもドストエフスキーでもそうでしょ。フランスのユゴーもそうでしょ。第一流のものはみな――説明ではない――告白なんだ。トルストイの『復活』のカチューシャのところは本当に告白文学だ。作者とその内容とが一つになっている。頭で説明しているようなものでは絶対にない。聖書が正に告白なんです。創世記から黙示録まで神さまから来ている光に対して告白しているのがこの聖書なんです。だから、飽きない。これがもしいわゆる説明なんかされたら、飽きてしまう。

ルカ伝にもどります。キリストは、

「火を投ぜんがために来た。平和ではない、戦いなんだ。分争なり」

と仰った。だから、今日は「霊戦」と書いた。霊的な戦いです。霊戦の戦いの力は何かというと、これが愛です。愛が最大の力です。愛の姿は十字架です。一切を自分が荷なってしまう。人を赦してしまう。人を背負ってしまう。論争なんかしない。こういうのが本当の勝利者になる。

議論したり、話し合いしている世界はダメなんです。告白して、それを聞いて「然り」と、同じ心境に入ってお互いに通ずる。その告白も今度は無言になって、言が要らなくなってしまう。目と目で言い表す。あるいは、姿を見てれば、それでよろしい。その姿が文字である。その顔が、その目が文字である。

文字というものは、書かれたものは、告白のものは別ですけれども、そうでないものは、

特にクダクダと説明されているようなのは、読んでいて嫌になってしまう。私は自分のことを言ってはおかしいけれども、私の著作集を読んでごらん、どこにそんな説明があるか。説明的な気持があるか。私の書いたものも全部、告白です。

●片手の合掌

本当の手紙は、そういったような種類のものです。手紙で、「祈っています」とか「お祈りします」とか書くが、あれは本当に祈っているかね。本当に祈っている人は何人あるだろうか。私は「祈る」と書いた時には本当に祈ってます。それでなければ、偽りになる。しかも、それは片手の祈りをする。もう一つは上から来ているキリストの手です。

「あなたのために片手で祈っているよ。もう一つの手は上から来ているキリストの手だ」

と、或る年賀状に私は書いてやった。片手で祈ると、もう片方はキリストの手が上から来ている。片手の合掌という。片一方はキリストの手だ。キリストの手が上から来ていると、ビリビリと自分が感動してしまう。そういう霊的な現実をもっていないとダメですよ。年賀状にも書いてやった、

「私は今年は91歳だけれども歳なんか問題にしていない。私は終りなき人間だから」

と。「終り」というのはお終いですから。文学でも、「完成」と言ったらダメなんです。完成されたものは、それでお終いというもの。未完成がいい。シューベルトの「未完成交響楽」みたいなもの、未完成が本当なんです。その先が知れず、というもの。皆さんも、何かやっていても、自分の仕事は終りなき仕事であるというと、かえって力がくる。いつ完成するかなんて、完成したらお終いということです。お終いなんてごめんだ。そういう無限無量の魂にならないとね。上から無限無量のものが来ているから。限定されたものは私は嫌いだ。無限定がいい。

空を見ていると、大空は無限定だ。夜の星の世界を見ても、その先は分からない。宇宙というものは不思議なものだ。

「マイナスの宇宙がある」

なんてなことを言っている人がある。魂が宇宙的になる。

「やれ日本の国だ、やれロシアの国だ」

なんて、そんな国境の世界ではない。国境なんか要らん。なぜ、

「ここまでは自分の土地だ、そっちはどうだ」

なんて、あんなちっぽけな争いをするかね。至る所これ日本でいい、至る所これロシアでいい。

無限無量の神さまを持っている文人と、そうでないのとはやはり違う。漱石さんなんかも、どうももの足りない。トルストイだとかドストエフスキーだとかミルトンだとか、向こう

のはやはり神の世界を持っているから違う。禅宗の無も、本当の無というものは、本当は無即無限無量なんです。キリストは無者であるから、実は無限無量者なんだ。カトリックでもプロテスタントでも何でもない。無限定のひとです。偉大な文学はみなそういう質をもっています。哲学ではやはりダメだ。文学の世界だ。それから、音楽の世界、これは凄い。

この頃、年の暮れにベートーヴェンの「第九」をやらない。もの足りないね。第九交響楽をやってもらいたい。何か、質が落ちてきたな。第一流のものを、世界的なものをやってもらわなくては。そういうものに感激しなければダメなんだ。この頃の若い人は感激性がなくなったのかな。そういう一流の文学なんか読んでいるのかな。

ルターの『クリスチャンの自由』という本は短いけれども、素晴らしい本です。最後は愛の自由、人助けの自由のことを言っている。自由は人助けのためにある。自分で勝手なことをしているのが自由ではない。それは自分に捕らわれている。いわゆる自由は捕らわれた自由なんです、本当の自由ではないんだ。

●キリストは我らの避け所

詩篇46篇にもどります。

1神はわれらの避所（さけどころ）また力なり、
なやめるときの最（いと）ちかき助けなり。

私は「神」の代わりに「キリスト」と読む。

「キリストはわれらの避け所また力なり。なやめるときのいと近き助けなり」と。キリストは全くその通りです、避け所です。キリストの中に逃げて行く。そうすると一番、力の世界に入る。これは面白い言葉です。「避所（さけどころ）」というのはよい訳だ。避け所でボヤボヤしているかと思ったら、そうではない。力だという。キリストの中に入っていくと、それはもう力の世界だ。いろいろな悩み苦しみがあるが、その時のいと近き助けである。もう、詩篇の46篇の第1節を読んだだけでたくさんだ。

「キリストはわれらの避け所また力なり。なやめるときのいと近き助けなり」と、そういうようにキリストにしがみついていますか。キリストの中に躍り込んでいますか。

2されば たとい地はかわり山はうみの中央（もなか）にうつるとも
我儕（われら）はおそれじ。

天変地異が、どんなことがあっても恐れない。こないだから、北の方でだいぶ地震があるね。昨日もこの辺でも地震が起きたけれども。我々はキリストの霊震で、キリストの霊的な震動で生きなくてはいけない。キリストの霊震を受けると、全身が熱くなる。私は寝る時に坐って祈ると、時々そういう世界に入る。そうすると、楽しいから眠るのが嫌になってしまう。目が醒めてしまう。大きな声で

「主さま！」

と叫びたいけれども、あたりがびっくりするから言わないんだ。沈黙の叫びです。西郷南洲が、

「天を相手にせよ」

と言ったけれども、我々は正にキリストを相手にする。キリストは無条件で受けとってくださる。こちらがどんな状態であるかは問題にしない。「主さま！」と言って自分を投げ込んでいけば、無条件で受けとってくださる。普通の人はなかなか無条件でない。ところが、キリストは無条件です。どんなに滑っても転んでも、キリストは無条件で受けとってくださる。

「私は余り聖書も勉強してないし、いいこともしてないから、キリスト様に叱られるかな」

なんて。キリストは叱りはしない。あるがままで投げ込んでいくと、無条件に受けとってくださる。そして、キリストの中に入ると今度は、

「キリストは避け所また力なり。いと近き助けなり」

と。その通りです。だから、天変地異が起きたって、一向に恐くはない。地震で津波が来そうになったら、詩篇46篇を読んでいればいい。

「ああ、なるほど。どうなったって、大丈夫だ」

と。

●霊現

3 **よしその水はなりとどろきてさわぐとも、**
その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。

凄いね、この言葉は。天変地異がどうなったって、何だと。この46篇は熾んなる文句だ。だから、ルターが好きだった。ところで、別な河がある。

4 **河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ**
至上者（いとたかきもの）のすみたもう聖所をよろこばしむ。
5 **神そのなかにいませば都はうごかじ、**
神は朝つとにこれを助けたまわん。

そういう霊界の河がある。霊泉が流れている。この霊泉の水を飲まなくては。聖霊です。聖霊は水に例えられたり、火に例えられたりする。御霊を飲むとか、御霊に燃えるとか言う。

私は「信仰」という言葉が嫌いだ。信じ仰いでなんかいるのではない。私には霊現、霊的な現実、うつつの世界があるのみです。霊的なうつつの世界です。夢ではない。現（うつつ）です。夢でも、凄い夢になるというと、私は夢だか現実だか分からなくなってしまう。

私が小学校の時の校長先生は佐々木吉三郎という素晴らしい校長だった。この校長先生は、

「哲学をもて。おさんどんでも、誰でも、哲学していかなくてはダメだ。青年は二十歳になって、哲学を持たないようなのは青年ではない」

と言った。哲学というのは、自分でものをしっかり考えるということで、いわゆる専門的な哲学を言っているのではない。

「本当に自分でもってものを考えていけ、捕まえていけ」

と。「考える」と言ったって、いわゆる思案ではない。単なる思想でもない。

「自分は大海の一滴だ。しかし、この一滴は生命があるから、それで世に貢献するんだ」

と言っている。佐々木吉三郎という校長さんの存在は、私はいつまでも忘れることができない。小学校の生徒を感動させるんだからね、私がもう90歳になっても昔の感動が甦ってくる。

●永遠の青年

本当の詩人というものは、詩の世界が本当の現実なんです。相対的現実ではない。或る絶対性をもった現実なんです。だから、本当の詩の世界は素晴らしい。歌の世界もそうです。

私は自分のことを

「天弓」

という。天の弓とは虹のことです。私は虹が好きです。無色透明の水滴に無色の光がきて、それで七色に光る。そのようなことをシラーが或る詩に歌っています。あなた方も、福音の世界を本当に生きていると、一人ひとりが詩人なんだ。ものを書く書かないということは問題ではない。本質的に詩人なんだ。私はドイツ語で詩を時々書くものだから、それを或るドイツ人が読んで、

「あなたには驚いた。普通のドイツ人は書けない。あなたは本当に生まれながらの詩人だ」

と言った。私は今、大きな詩を書きつつありますけれども、楽しくてしょうがない。何でも、あなた方がやっていることが楽しくなければウソなんですよ、

「ああ、しょうがないな」

なんていうのでは。

「楽しくてしょうがない」

という、そういう「しょうがない」ならいい。何でもあなた方がなさっていることは、楽しくてしょうがないやり方をしてください。それは、この福音の世界の福音的な魂だと、そうなってくる。

「謹賀新年」なんて言うけれども、しょっちゅう謹賀新年なんだ、楽しい。古びない新しさです。普通のものは古びる。ところが、本当の新しさというものは古びない。いつまでも新しい。

柳田邦男さんが

「本当の青年は、年齢（とし）が若いということではない。魂が永遠的な若さを持っている、それが本当の青年だ。どんな老人であろうと、どんな若い人であろうと、年齢は関係ない。ところが、青年でも、そういった勢いのないのは始めから老人だ。本当の青年というものは年齢に関係ない」

と書いている。結婚していようがいまいが、そんなことは問題でない。永遠の乙女であるか、永遠の青年であるか。これは滅びない福音を持っていると、そうなる。

「なぜ、小池先生は元気がいいのか。あれは水泳をやっているからだ」

なんて、そうではない。水泳をしているからではない。

霊界から力が来ているからしょうがない。いわゆる「信仰」ではありません。霊現の世界です。

「まだ私は信仰がどうで…」

なんて、そんなことを言っているうちはダメだ。普通のクリスチャンは

「まだ信仰が…、もう少し信仰が深くならなければ」

なんて言っている。

「信仰なんかよせ、そんなものは問題にするな。ゼロで行け。無即無限無量になるぞ」

と言いたい。皆さんは――語るも聞くも同じこと――私と同じ気合であなた方は聞いているから、楽しいでしょ。そうでなければ楽しくないよ。

●どうなったって構わない

詩篇46篇に、「どうなったって構わない」と書いてある。

6 **もろもろの民はさわぎたち、**
もろもろの国はうごきたり。
神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ。

神さまの声で地がとけてしまう。何を騒いでいるかと。詩篇2篇にもそんなことが書いてある。

「天に坐するもの笑いたまわん、主かれらを嘲りたもうべし」（詩篇2・4）

なんて書いてある。

7 **万軍のエホバはわれらとともなり。**
ヤコブの神はわれらのたかき櫓（やぐら）なり。
8 **きたりてエホバの事跡（みわざ）をみよ、**
エホバはおおくの懼（おそ）るべきことを地になしたまえり。

出エジプトの時もそう。出バビロニヤの恵みもある。

9 **エホバは地のはてまでも戦闘（たたかい）をやめしめ**

弓をおり戈(ほこ)をたち戦車(いくさぐるま)を火にてやきたもう。

この9節は素晴らしい。

10 **汝等しずまりて我の神たるをしれ。**
われはもろもろの国のうちに崇(あが)められ、
全地にあがめらるべし。
11 **万軍のエホバはわれらと偕なり。**
ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

全世界に崇められるという。この46篇というのは素晴らしい。戦いを地の涯までやめさせてしまう、戦車を焼いてしまう。素晴らしい超現実の言葉をズバリズバリ言っている。46篇というのは力強い詩篇だ。私は詩篇150篇のうちで一番好きな詩篇の一つが46篇です。46篇は「ルター詩篇」と言われるくらいルターは好きだった。

詩篇の2篇も素晴らしい。2篇、8篇、16篇、19篇、22篇、23篇、27篇、そこらはみな素晴らしい。各節が全部というわけではないけれども、それぞれの中に素晴らしい言葉が溢れている。32篇、33篇もいい詩篇だ。116篇、121篇、130篇、139篇、148篇なんていう詩篇は非常に素晴らしい。

旧約では詩篇と預言書が一番大事です。この預言者たちは素晴らしい。新約の内容がこの中にこぼれている。大体、新約よりも旧約の方が文章が詩的です。ヘブライ語そのものが非常に詩的なんです。

●求めざりしもの

私は大学の一年の時に、ドイツ語の他に一番先に何を勉強したかというと、ラテン語やギリシヤ語ではなく、ヘブライ語なんです。旧約の預言者のものを原語で読みたいという希望で、ヘブライ語から始めた。そんなドイツ文学の生徒なんかは他にいませんでしたから、ヘブライ語の先生の宗教学の講義を聞きにいくときに、時々私独りになってしまう。

「あなたは何科ですか」
「私はドイツ文学です」
「よくやってくるね」
「旧約の預言書を私はヘブライ語で知りたいから、講義を聞きに参りました」

と。無教会でヘブライ語をそうやって、旧約を最初に切り開いたのは私なんです。藤井先生なんかはその後からやった。

日本語で結構です。この日本語の聖書はなかなか訳がうまい。立派な日本語です。眼光紙背に徹すると言って、その文字の奥の神の響きを、あなた方は御霊の光でお読みになれば、もうそれで充分なんです。

イザヤ書65章に、

「我はわれを求めざりしものに問いもとめられ、我をたずねざりしものに見出され、わが名をよばざりし国にわれ曰(いえ)らく、われは此(ここ)にあり我はここに在りと」
（イザヤ65・1）

とある。この言葉は素晴らしい。我々日本人は正にこの「求めざりしもの」なんだ。我々は大体、

「聖書なんてものは妙なものだな」

と思って、始めは手にもしなかった。ところが、そういう「求めざりしもの」に今度は逆に求められる。聖書ほど楽しい本がなくなってしまった。教えではないんだから。天来の響きだから。あなた方は

「キリスト教」

なんていう言い方はよしなさいよ。教ではない。キリストの声です。こっちからはキリスト告白、エホバ告白です。エホバの声、姿とは無形の形、形なき姿です。

「聖書がむずかしい」

なんていうのは文字面で読んでいるからむずかしいんだ。「むずかしい」なんていう言い方がそもそも聖書に対する態度が間違っている。ちょっともむずかしくはない。パウロはなかなか理屈ぽいことを言うけれども、パウロのもう一つ奥を読んでしまう。パウロよりもヨハネの方が端的です。ペテロはその中間だ。

「パウロさん、これはあまりくどいではないですか」

と私は時々言いたくなる。パウロはギリシヤの思想を勉強して、ギリシヤ文化も一緒に混じっているものだから。パウロというのは学がある。ヨハネの方は学がない。だから、端的なんだ。パウロ書翰というのはなかなかややっこしい。けれども、パウロが何を言ったって、その奥をグッと読める。支配されない。御霊の力で読んでいると、決して支配されない。

●言行一如

使徒行伝はさすがに実存の世界だから、これは楽しい。藤井先生の悪口を言うわけではないけれども、藤井先生は無教会の流れの人なので、

「使徒行伝なんていうものは行為の世界だから、信仰の世界が第一義でないから、あまり尊くはない」

なんて言う。そうではない。使徒行伝は生活そのものでぶつかっている。いわゆる行為(おこない)ではない。生命賭けでぶつかっている世界です。使徒行伝というのは凄い。単なる言葉の世界ではない。

「言行一如」

なんです。言と行を分けているうちはダメです、言行一如でないと。手足でものを言って

いるのが行です。口でものを言うのと手足でものを言うのとは同じなんです。

「言うは易く、行うは難しい」

なんていう分裂した考え方はダメです。そういう分裂的な言い方をしているときは、そんな言もそんな行もどっちもダメなんだ。

本当は元は行なんです。実践している。実践しているから、それが自ずから口に出るのが言なんです。言が先きだったらダメです。黙って動いている世界、黙って働いている世界、これが行なんです。それを口でもって告白するのが、これが言です。言が先きだったらダメなんだ、行がもとでないと。人に何も言われなくても、黙ってやる人がいる。ああいうのが本当の在り方なんだ。これは本当の行者だ。何とかいろいろなことをしゃべってからものをやろうというのは、これは分裂していてダメなんだ。

集会も、ただ間に合うだけに来たってダメです、もっと実存的、行動的にならないと。お互いに助け合ったり、掃除したり、そこらを整えたり。なにも、あなた方はお客さんではないのだから。皆、共同でもって一生懸命でこの集会を生活の一部分としてやっているわけだ。

●キリストの手

詩篇46篇にもどります。神さまはもの凄い力でもって戦いをやめさせる。だから、

10 **汝等しずまりて我の神たるをしれ。**
われはもろもろの国のうちに崇められ、
全地にあがめらるべし。
11 **万軍のエホバはわれらと偕(とも)なり。**
ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

「しずまりて」というのは、じーっと神さまのみ許に坐っている。ということは、「しずまりて」は正に祈りの態勢なんです。

「祈り入れ、祈入せよ」

ということです。

両手の合掌よりも、片手の合掌の方が本当なんです。キリストの手がこっちからやってくる。これが本当の祈りです。あなた方、夜寝る時や朝起きる時に、こうやって片手で祈ってごらん。キリストの手がくるから、ビリビリビリビリと。とにかく、霊的な現実でなければダメですよ、いい加減なことでは。一日何をしていても、御霊の力が働いている人でなければ、クリスチャンなんて言ったって、何もならない。それは観念クリスチャンでダメなんだ。

46篇というのは短いけれども、素晴らしい力のある詩篇だ。神の力は悪魔をやっつける。弱い人や苦しんでいる人や、そういう人たちを全部助ける、そういう愛の力です。そこが、

「キリストは我らの避け所また力なり」
ということです。そして、その力が自分を通して働く。
私は年賀状にも書いた、
「天恵豊かにありますように。その豊かさはあなたに溢れて、隣人に伝わっていく豊かさです」
と。あなた自身が豊かになったってしょうがない。豊かということは、それが流れていかなければ本当の豊かさではない。いわゆる幸せなんていうことをひとつも祈りはしない。天の恵みはその人を通して流れていく。それでなければ、淀んでいたらこの恵みは腐ってしまう。淀んでいたらダメなんだ。
私は今朝がた、アルプスの絵を壁に貼った。アルプスの山は素晴らしい。そこに湖がある。あれはスイスのジュネーブ湖だ。湖があるからいい。あれは恵みの水だ。私は何をするにも、心なきことはやらない。
ルターが詩篇46篇を自分らしい言葉に直して讃美歌をつくった。（ルターの讃美歌「アインフェステェ　ブルク　イスト　ウンザー　ゴット」を独唱）